

陶芸の森に 穴窯が再現され 初の窯だし



原稿執筆者
まちかど特派員
小谷 柳太(信楽町)

「陶芸の森」で9月17日、穴窯の窯出しが行われました。この穴窯は16世紀半ば戦国時代に築造されたものを陶芸の森と関係者が再現したものです。

泉北の埴輪(土器)の例でも分かるように、窯は土と水と樹に近いところに築かれました。穴窯は後世、登り窯が出現する以前の原初的な窯です。山の斜面に文字通り「穴」を掘り抜いたものが始めですが、工程を簡略にする目的か、開削した溝に天井部を付けたものへと徐々に移行されています。再現された穴窯は第二名神の工事に伴い発見・発掘されました。発見地(信楽町黄瀬金山)にちなんで「金山遺跡」の穴窯跡と呼ばれています。特徴的なのは「双胴構造」であることです。熱効率と容量の向上をめざし、炎道(煙道・焼成室)が二本並行した構造になっています。

陶器生産の永遠の課題は熱効率。限られた燃料をいかに効率よく焼成に寄与させるかです。穴窯に続く登り窯の工夫や、現代の信楽で主流になっているガス、電気窯も、この永遠の課題を解決するものとして活用されてきました。双胴の穴窯を工夫したのも「しがらき」の語源「繁木」(しげらぎ)の山々も、この時代に入ると樹木が無尽蔵に使えるところが少なくなってきたとも考えられます。

地元の陶芸関係者の協力でこの春、再現された双胴の穴窯は、焚き口の高さ約1.1m、幅約3m、全長約10mで、陶芸の森の傾斜地に築造されました。

この穴窯で作品を焼こうと持ち込まれた点数は75人の壺・鉢・皿など約500点。9月1日、2日にかけて窯詰め、左右両方の炎道の奥から同時に詰められました。作品の安定性を求めるため「馬の爪」は使わず、棚板も用いられました。昔の焼き方を忠実に再現しようと



▲ 窯出し作業は終始、屈みながら。昔の人も大変だっただろう

すれば馬の爪を用い、棚板などは使わないようにするのですが、作品の保護からか、窯詰に関しては現代的な処理が施されました。また、中世の穴窯では燃焼室(焚物が燃える箇所)には本来、作品を詰めなかったと推定されますが、この窯詰では大壺数点を置きました。ただし、温度が400~500度に上昇した時点でこれらの殆どが火当たりでヒビが入り、後に崩壊したようです。築窯当時のように割木でなく切放しの丸太の場合は、この箇所で焼成するのは難しかったと想像できます。

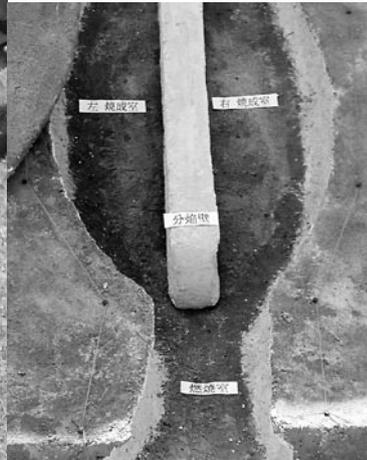
燃料は丸太(4つ割)が4t車に半分、松のコワ板が2台、登り窯でも使う松割木が20束、それに雑木・竹などが1台。それらを6時間交代で常時10人程度で焼き続けました。焚き始めた3日から、4日目の夜中(6日)に火止め、17日の窯出しとなりました。作業、見学の人など最盛時には100人を越しました。

“初窯”だったので“調子”が取りにくく苦肉の場面もあったようですが、出てきた作品の思わぬ“景色”に感嘆の声もあがっていました。次回の焼成は12月の予定ということです。

▼ 秋の陽光に照らされる作品群



▼ 双胴の穴窯の模式レプリカ



▼ 焚口から覗いた穴窯内部。前方の作品は崩壊していたが…。双胴を隔てる仕切り壁が見える

